

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第791号 平成26年8月22日

つながり格差（2）

志水教授によると、「昭和の全国学力テスト」の結果を分析すると、「豊かな地域の子どもの学力が高く、貧しいところの子ども達の学力はふるわない」というもので、当時は、学力格差は「都鄙格差」に由来すると考えられていたようです。

志水教授は「都市と田舎の圧倒的な生活環境の格差が子ども達の学力に圧倒的な影響を与えていた」と述べています。他方で「平成の全国学力テスト」の結果を分析すると、経済的要因は一定程度子ども達の学力と関連していたものの、それ以上に学力と高い関連を持つ現代的要因として「離婚率」「持ち家率」「不登校率」という三者が浮かび上がって来たといえます。

志水教授は、戦後の高度成長期を経て、平成時代の今日において、「かつて地域間でみられた生活環境や情報環境の違いは驚くほど均質化・画一化され、少なくとも便利さや快適さという次元で見ると、問題視されるような『地域差』はなくなった」ものの、「逆に、それとは異なる過程が同時に進行した。それは、人々のつながりの消失あるいは変質の過程」であり、「こうした問題がより深刻なのは都市部である」と述べています。

こうした「人々のつながりの消失」こそ「平成の学力格差」を生み出している要因ではないかというのが、志水教授の主張であり、「離婚率」や「不登校率」の高さは、「人々のつながりの消失」を象徴するものといえると思います。

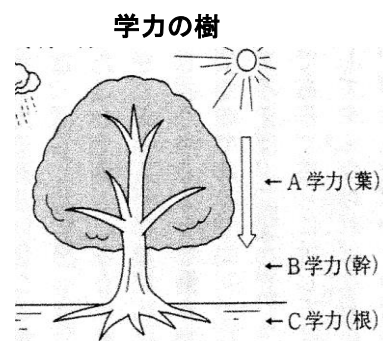
志水教授は2001年（平成13年）、子ども達の学力格差問題を検証するために「文化的階層」というカテゴリーを作り、そのグループを上位層、中位層、下位層に分けて、それぞれの階層別に子ども達の学力の状況等を比較分析しています。ここでいう「文化的階層」というのは、たとえば「家の人テレビでニュース番組を見る」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」等5つの項目の結果を数値化したもので、この調査の結果、小学校、中学校共に、学習意欲、学習行動、成績いずれについても上位層から下位層へと並んでいて、それぞれの階層で断裂があると指摘しています。

つまり、今日の地域間、学校間の学力格差は、かつてのような都鄙格差として現象するものではなく、文化階層的な格差の影響が大きいという事であり、そうであれば、学校現場の頑張りだけでは、子ども達全体の学力を向上させる事は非常に難しいといわざるを得ません。

子ども達の中に、勉強が「出来る子」と「出来ない子」という学力格差が何故生じるのかを考える事は、学力向上という課題に取り組む上で重要ですが、その問題を考える前に、まず、そもそも学力とは何かを考えて置く必要があります。

私は以前、PTAの研修会に呼ばれてお話しした際に、学力にはテストで推し測る事が出来る、「見える学力」と、思考力や判断力のように「見え難い学力」、意欲や関心といった「見えない学力」があり、海に浮かぶ冰山と一緒に、「見える学力」を大きくするためには「見えない学力」を大きくしなければならないとお話した事があります。

志水教授も、学力について、「見える学力」と「見えない学力」があると認識しており、子どもの学力を樹木になぞらえ、「現代の子ども達に必要とされる学力は、3つの部分から成り立っている。葉（知識・技能）と幹（思考力・判断力・表現力）と根（意欲・関心・態度）である。これらが三位一体となって、一人ひとりの子どもの学力の樹を形づくっている。」と説明しています。そして、私



志水宏吉著「学力を育てる」から転載しました。

達大人に出来る事は、彼・彼女にとってベストな環境（それが出来なければベターな環境）を用意する事であり、子ども達は、その環境と主体的に関わり、取捨選択を繰り返しながら、自らの「学力の樹」を作って行くと述べています。

私は今、子ども達に対して自ら「学力の樹」を作る事が出来る十分な土壌（環境）を提供して来ただろうかと、反省を込めて振り返っているところです。

（塾頭：吉田 洋一）